
LAST COMMUNICATION ~ THE END OF EARTH ~

斉藤ノリヒデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LAST COMMUNICATION ~THE END OF EARTH~

【Nコード】

N2263C

【作者名】

斉藤ノリヒデ

【あらすじ】

瀬暦^{せいれき}2006年。遙か遠く、限りなく近いこの世界で、主人公たちは血に塗れた戦争に参加していく。ロボット物の幼稚な文章の話。

プロローグ（前書き）

この小説はロボットものです。ただ描写が稚拙すぎます。それでもあなたは読んでくれますか？

プロローグ

例えばこの世界が、明日には消えてなくなろうとしたとき。
俺はどうしていればいいのだろうか？

例えばこの世界で、俺一人しかいなかったとき。
何を求めて生き続けなければならないのだろうか？

何を考え、それを実行すればいいのだろうか？
何を考えて生きればいいのだろうか？ 俺の周りにはもう、俺と
親しい人間なんていないのに。

瀬暦^{せいき}2010年。 日ノ本 柊^{ひいらぎ} 紘文^{ひろふみ}の手記より抜粋。

プロローグ（後書き）

ありがとうございました。

第一章・沖縄編 1

薄暗い空間。照らし出される微弱な光はプロジェクターから映し出された擬似的な画面。

薄汚い絵が操縦桿を動かすことで、リンクして動く。

スティックは腕の動きを。ボールは指の動きを。そしてペダルは脚の動きを。

四点式のシートベルトで体は固定される。少し息苦しいぐらいだ。

敵機体が接近しつつ射撃。標的はこの機体。被弾。被弾。

脚部、頭部に命中。しかし、問題はない。日ノ本の戦術機は装甲ひのもつせんじゆつきに自身があるとはよく言ったものだと思う。たしかに異常は微塵にも感じられない。

それでも衝撃は走り、操縦席全体が小さく揺れる。ペダルを踏み、バランスを保つ。

攻撃に順番なんてものは存在しない。撃たれたら負け、撃つたもん勝ちだ。それは否定できない。確かに間違いないからだ。

「コマンド、RSアルエス起動」

そう音声認識を交わすと、制服の中に入っている信号が起動し、制服の筋がほのかに青く光る。軌道は正常、という意味だ。

RSは上半身、腰から上の動作を操縦者とリンクさせるというものだ。リアクションスイッチ、またはリアクションシステム。それが正式名称だ。機体の頭はアイゴーグルに合わせて動く。それで自分の手を機体の目を見比べて確かめる。確かに正常に起動している。右胸のパッチにかけられている戦術機専用コンバット・ナイフを手に取り、逆手で持ち変える。

ペダルは固定動作。固定された動きしか出来ない。走る、歩く、跳躍、しゃがむ。

二つのペダルを組み合わせれば、匍匐ほふく前進なんていうのも可能だ。

走りのペダルを踏む。機械の音が少し重たくなり、機体の模擬装置がゆれ始める。

右手はナイフを持つ形。時速は約40キロで走るこの機体は、大きく揺れながらも次第に敵機体へと近づいていく。

「……っ！」

接触する瞬間、右手を強く前に出す。当然ながら機体は同じ動きをする。

敵機体の胸部に狙い通り、ナイフで大きな傷をつける。ゆっくりとした模擬訓練だった。

シミュレータの訓練機体は揺れだけは大きく、敵の機体が著しく貧弱だという。

だからこんなものでも、多少のものはのれれば士気は沸くといった感じだった。

第一章・沖縄編2

すべてが日常で、すべての行動がごく普通のことだった。それがこの俺の生活環境なんだ。

精鋭兵訓練施設。俺たちはそういう名前の学校みたいなところに入れられている。二十歳になるまでにはすべての項目が終了し、戦場へと向かわされる。

基本としては戦闘機操作などの訓練だ。拳銃から戦車、空は戦闘機に至るまで、すべての乗り物に精通していなければならぬ。その人間を作るのが、その精鋭兵訓練施設というものだ。

「柎、凄い事になってるね。成績の桁がみんなとは二桁も違うよ！」
シミュレータから外に出る成りに、驚きの声を浴びせられる。

柎、とは俺の名前だ。柎 なかにし 紘文 ゆうぶん

そして成績云々とかで驚いているのは中西 なかにし 祐樹 ゆうき

俺は岐阜県出身でこいつは確か鹿児島出身だったか。九州生まれにしては性格というか声の張りはあまりなくて、性格は優しくしっかりしたいいやつだ。

「シミュレータだしな……」

一通り乗りこなせる人間にしか分からないことだが、この戦術機のシミュレータは動かせる人間とそうでない人間とでは成績にはつきりと差が出る。初期動作までに時間が食われてるとその分成績から減点される訳だし、力量を抑えてある敵影に被弾してもやはり減点される。

戦場ではありえない設定が出来る。かく言う俺も、一対一の戦いつてのをやっていた。実際、そう孤立することなんてないことだろうに。基本は大量機体対することの大量機体だ。

「柎、次は僕にやらせてもらうよ」

そういうと、中西はシミュレータ脇にあるパソコンに自分のID

を認識させ、中に入ってしまった。

これが日常、日常なんだ。何もくるってはいない世界という認識がある。

確かに、この状態じゃない日々は考えられんことはない。世界は緊迫した状態なんだ。

1999年～2003年。

対黄色人種と白色人種との間で戦争が行われた。

ことの始まりは1999年の10月のこと、米ノ国へ稼ぎに行っていた中ノ国人が惨殺されることから始まる。人種差別という壁に起こる殺害の嵐だった。その中に、日ノ本の人間も多数含まれている。

怒りを露にする中ノ国人らは軍隊を率い、米ノ国へ進軍。ハワイ、マウナケア島を占領に成功、真珠湾を軍事拠点として展開する。(売楓^{ばいふう}作戦)

そのとき、日ノ本は戦争には参加せず。自国の防衛に徹した戦いを続けていた。日ノ本は二次大戦時に米ノ国に対し痛手を負っていた状態が続いていたためと、新兵器の情報が漏れることを防いだため^{せんじゆつてきにそくほこうがたせんとうき}の状態だった。(このときの新兵器・戦術的^{せんじゆつぎ}二足歩行型戦闘機・略称^{えんくう}・戦術機の新型機は現在日ノ本で全国配備の円空である)

戦争凍結状態であった多国の状態は一気に凍解し、火蓋は切られた。

2000年1月。米ノ国軍は戦術的核兵器の使用を決行。中ノ国の首都「北京」は完全消滅。衛星写真での確認後、更なる核攻撃を実行。次に軍事拠点だった(当時)重慶を消滅させた。(消滅させたとの言い方は、ここでは利用方法、または価値をなくすの意味で使っている)

このとき、ハワイ島が狙わなかった理由としては以下のものがある

る。

- ・米ノ国国民が少なからずも存在するため
- ・その島における重要な遺産を残すため
- ・文化を守るため

保守的な考えを持つ米ノ国人の考えることであり、以上のことによりハワイ島本土決戦は行われなかったとされている。

2001年8月。

硬直状態にあったと思われた世界が、一気に動きだす。

ハワイ、マウナケア島に拠点を置いていた中国がそこから米ノ国本土への決戦へと進ませた。（このとき、参加国は中ノ国、露ノ国、そして米ノ国と世界的大規模な領土を持つ国だけだった）

中ノ国は、戦術的核兵器を少なからず保有してはいたが、使えるほどの威力ではなかったため使われることはなかった。（ただし、このとき露ノ国では「ツァーリ・ボンバー」を使う計画を立てていた）よって、現在におけるまでも米ノ国人には被爆者はいない。（戦争での被爆者は、という意味での使用である）

2002年。中ノ国本土に米ノ国軍による三度の戦術的核兵器使用。このとき、戦争に参加していなかった日ノ本にもそれが投下される。

以下に理由を書く

- ・日ノ本には新型機が存在。それが脅威になるやも知れえぬかったため。
- ・有色人種の国であったため。
- ・当時、戦況下とはいえ日ノ本は少なからず中ノ国を支援していたため。

その年、日ノ本は京都、沖縄、九州、東海地方、北陸地方を除く

全ての地区が焼け野原と化した。(タイムメイト作戦)その作戦により、日ノ本の人口が半数以上が死亡したと予測、その後日ノ本に攻撃は一切加えられることはなかった。

そして、2003年4月。

各国の戦争状態は再び凍結状態に入り、現在もなおそれが続いている。

.....。

「柊さん、柊さん？」

誰かに体をゆすられている。目を開けると、そこにはショートカツトの女が立って、俺の肩をゆすっていた。

「ん.....？ 碑ひが賀か.....？ なんだ？」

俺が起きるのをを確認すると、たとえようのない笑顔で、笑った。「柊さん、こんなところで寝てたんですか？ もうすぐ夕食の時間です、早く行かないと材料がなくなりますよ？」

そう、碑賀はというと俺に背中を向けて去っていった。

シミュレータームの壁がけ時計を探し、見てみれば、確かに六時半を過ぎていた。

材料がなくなる.....？

「あ.....」

思い出した。そういわれれば今日は

第一章・沖縄編3

精鋭兵訓練施設では、食事は全て自分で作ることになっている。

朝は六時から七時半までの間に、昼は十一時半から一時までの間に、夜は六時半から八時までの間、それぞれ一時間半の間に食事を作り、済ませなければならない。材料は一応、施設生の量は用意されている。しかし、先にとったモン勝ちというルールが存在する。

材料は全て均一に存在するわけでなく、バラバラに存在する。これも日ノ本の農業事情、蓄膿事情が喜ばしくないから仕方がないのだが。

人気のある肉類は当然、先になくなる。米も当然その次になくなるだろう。現在の状況は基本中国産、タイ産の輸入米だが、食べれば今の時代はそれに越したことはない。それでも無くなってしまっただ。

時間が短いから、洗ってすぐに米を炊かなければならない。硬いご飯が出来るが文句はいつていられない。と、いうよりもそれが普通なんだ。

碑賀の後ろを追っかけて　　といつても、もうすでに姿は見えなかった。

何を思ったか俺はシミュレータータールの待合の椅子で寝てしまっていたんだ。こんなところで寝ていなければ、と結果論を持ち込んで考えてみたが、すぐにやめた。

今は自分の食事を最優先にするべきなのだからだ。

そう考え、すぐに走って厨房へと向かう。

走っていく廊下では何人も施設生とすれ違う。同じ目的地に向かい、皆足を進めている。

厨房を兼用の食堂にたどりつけば、沖縄県精鋭兵訓練施設第二支部（おきなわけんせいえいへいくんれんしせつだいにしぶ）におお

よそ全員が集まり、ごった返していた。それでも、皆は皆、協力し合うといった観点だからだろうか？ 喧嘩や暴動は起こらなし、無駄な取り合いや小競り合いはしない。

「柀、こつちにきな！ これをわけてあげるよ！」

ざわめきと喧騒の中で、女が俺に向かって手をあげて呼んできた。そいつの名前は、響ひびき瞳つらみ

この施設で育った一人の女の訓練兵だ。年は俺と同一年か。

「貴重な日本米、そして新鮮な卵。お前、こんなもんどつからもつて来たんだ？」

米の形で種類が分かるようにまで教えられた。

「具志堅、あんたがもつてきたんだろ？ 説明してやってよ」

そう響が後ろを向くと、アフロパーマに近い天然パーマの大きな男が立っている。

名前は具志堅くしけん 武次郎たけじろう。響と同じく沖縄県精鋭兵訓練施設で育った訓練兵だ。

「いや……俺はただ、選んでいたら皆避けて……」

図体がでかいのと共に、顔が老けているせいでか、俺と響と碑賀と中西以外のやつらからは避けられている。本心としてはけっこう優しいやつなんだが、見た目がどうかで決められてるって感じた。「ははは！ ぐっさんがいるといいモンが食えるよ！ いつもありがとな！」

ぐっさん、とは俺たちの輪のやつらが使う具志堅の呼び方だ。

第一章・沖繩編 4

一通り食事が終わり、各自夜の自由訓練へと戻る。そこから十一時までは自由に行動してもいいということだ。

俺の場合は運動館に行き、走る。もしくはさつきみたいにシミュレータ訓練をするかのどっちかだ。ほかのやつらは風呂はいつて寝るやつもいれば、ギリギリまで訓練に励むやつもいる。そこが精鋭兵らしくないといえばそれまでだが。

精鋭兵足る物云々……なんて言葉はない。厳しい教官なんて殆どいない。二十歳になればそいつがどんな状況であっても、三十五歳までの間前線で戦い続けなければならぬ。それまでの猶予は好きに使わせてやる。とのことだと曹長殿は言っていた。もちろんその言葉は精鋭兵訓練施設設立時の天皇の言葉だとされている。曹長殿はその言葉を聞いて死ぬ覚悟はいつももっていたとも言っていた。天皇の管理下であり、そして日ノ本の国の元にいる俺達は天皇の言葉は絶対である。そして、国のためになら死ぬことが出来る。そう教育されている。

「柊、これからなにをする？」

響たちが俺に話を振ってきた。

「俺？ ……そうさな、運動館行って入ろうと思ってる」

それを聞いて、何故か笑顔になって俺に顔を近づけてきた。

「走る？ じゃあさ、私達と一緒にシミュレータ訓練しない？ 一人でやるより皆で、って昔からよく言うじゃない？」

どういう話だ。こいつはこんな風に強引に誘ってくるわけだが、それを断る理由も特になかった。

「ああ……。別にいいよ。俺でよければ」

俺も久しぶりに合同でシミュレータ訓練をしたいとは思った。響の話を持ちかけられてぱっと思いついたただけだが、一人でコンピュータ相手の訓練よりかはよっぽどタメになる訓練にはなるからだ。

「じゃあさ、決定！ 今からいこう！」
服の袖をいつの間にか捕まえられて、逃げる由もなく連行された。

「私と具志堅と中西でチーム。柊は力量があるから京一人で上等っしょ？」

そして半ば強引にチーム分けまでされた。別に不服はないが……。成績といっても、それは殆どシミュレータのコンピュータ相手であるからの成績であって、実際に操縦する相手だと勝手が違う。なんせ均一な動きはしないし、補足してから発砲するまでの時間が長いわけでもない。やたらと打ち込んできたりもするだろう。だからシミュレータ慣れしていると厄介なもんだ。気を引き締めてかからなければならぬだろうに。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

隣通しのシミュレータに入る前に、コンピュータにそれぞれのIDを認識させ、設定しチームを振り分ける。そしてして指定されたシミュレータボックスの中に入る。

シミュレータボックスの下には多重間接の擬似振動装置が設置されていて、衝撃が走ればそれがそのまま数値化され、データ転送されたその装置が動くようになってる。

「柊たちに一泡吹かせてやるよ！」

そう、響が中西とぐっさんに活を入れた通信が聞こえた後、相手側からの声は遮断された……。シミュレータ訓練は開始された。

第一章・沖縄編 5

精鋭兵訓練施設教養書。 戦術機の項。 操作方法と搭乗時起動手順。

戦術機に搭乗する際の注意事項。

第一に訓練施設生制服であること。 この服でない場合、RSは使用不可能である。(それとは別として精鋭兵標準装備強化服がある)
第二に体調は万全であること。

第三に二人乗りはしないこと。(初期型の戦術機が副座型ではあるが、現在のものはその形式のものはない)教官(又は上官)は操縦席に取り付けられたカメラを見て状況を見るため、心配は無し。

この三つの事を守らなければ、嚴重注意。 または単独房へ移送をさせることがある。

搭乗後、操縦席に着席。 その後、四点式シートベルトで体を固定する。 へその辺り(または鳩尾^{みぞおち})のあたりに留め金が来ることが望ましい。

固定したら、操縦席上部に掛けられているアイゴーグルを外れないように取り付ける。

アイゴーグルは強烈な光が発せられたとき、自動的に保護膜となり操縦者の目を守る。 それ以外のときでも、右耳側につけられているボタンを押すことで頭の動きと戦術機の頭を同調させて動かすことも可能である。

左側パネルのふたを開け、全ての電源を起動させる。 主電源、予備電源、通信機、RS、VC、ABS、FBSがある。

電源を入れた後、プロジェクターの起動が確認されれば正常に作動している証拠である。(操縦者から見て正面のモニターが真っ白く映し出されていれば良い)

その後、起動の状態を管制室に(又はドックメイト)通信し、本

体へと接続をする。

日ノ本製の戦術機の最新型の殆どのコックピットは、CB=COCKPIT BLOCK形式を採用しているため、接続の必要がある。背中側から差し込む場合が殆どである。

注釈・CBとは？

上記のとおり、コックピットブロックの英字での略称である。前代の戦術機・天叢あめのむら以降はこの形式を採用している。CBは戦術機の装甲よりも五倍丈夫に出来ており、間違った搭乗方法をしなければ生還率は高くなる。本体が全壊しようとも、CBだけは壊れない設計をされている。それについては、搭乗者の保護も含め、二台目、三台目の戦術機への即時換装を可能とするためである。それを可能にすることにより、連続出撃が可能となる。

戦術機は基本は電力で動いており、爆発するような燃料は使われていない。武器弾薬による爆発はあるが、全て外部からの爆発であり、内部から爆発することはまず、無い。

CB接続後、プロジェクターより映し出される画像が、白から背景画像に変われば接続完了である。画面が切り変わるまで一分から二分ほどかかる場合があるが、自動補正をしているだけで心配は要らない。

以上が戦術機の搭乗方法である。

以下に、操縦方法を記載する。

戦術機の操縦方法。(この項に記載するのは戦術機・円空以降のものである。これ以前のものは若干ではあるが操作方法が違ってくる)

操縦席の両脇にはボールとスティックが存在する。これは戦術機

の上半身及び固定動作時の方向転換に必要な不可欠なものである。ポールは手の動き、指の動きを。スティックは腕の動きを操作する。基本的には片方固定時に片方操作と言う形で動かす。

音声認識で R S = R E A C T I O N リアクション S Y S T E M システム を起動することにより、その操作を操縦者の動きに同調させ、省くことが可能である。

行動については、足元につけられている複数基のペダルを踏む事によって「固定動作」が起動する。固定動作は、歩く、走る、とまると、しゃがむ等の固定された動きをする動作である。出来る動作は決まってはいるが、複数基のペダルを踏む事により、匍匐ホフク全身も可能である。(しゃがむ+歩く)の固定動作ペダルをしゃがむ→歩くの順で踏む。どちらかのペダルを放してしまうと、踏んだままのペダルの動作をしてしまうので注意する(このペダルにも固定用スイッチが存在する)。

以上が、戦術機の搭乗、操作方法である。機内設備については別記記載の事である。

第一章・沖縄編 6

「碑賀、状況は？」

訓練開始後、周りの状況を把握できる手段は、仲間との通信か右手側にある陸地用機体中心型レーダーかだ。それ以外からはモニターから見える画面の情報を自分で判断するしかない。

目視で画面を確認しても、見えるものといえばビルの廃屋。今立っている所は大通り両側三車線の道路のど真ん中。そして左となりには碑賀の機体。正面まっすぐの道だが、倒れた信号の支柱や電柱が、そして立ち上る煙と火が視界を悪くしている。

『開始直後で詳しい事は分かりません。敵機体は三体だと言うことだけが分かっています』

ま、それは間違いないな。メンバーは俺含めて五人だ。

「了解。さあ、どうする？」

そう碑賀に作戦を相談しようと思ちかけてみた。

『柘さん、突っ込んできてください。私が補助します』

……おお？ いきなりそうしろと言うんか。

「きついな……。俺一人特攻か？」

そうとも取れる。玉砕精神で行けと言うことだ。まあ、俺の命に玉ほどの価値なんてものは無いんだろうが。

『特攻じゃありません。柘さんが私よりも接近戦がずば抜けて上手いからです。私はこうでもしないと足手まといにしかありません』

その後の作戦概要としては、俺と碑賀の機体間距離は一キロを保ち、俺が前、碑賀が後ろだ。さっきのとおり、碑賀が俺の攻撃を補助する。こいつの戦術機搭乗時の射撃精度は69点だがまあ、心配はしなくても……いいだろう。

「……以上だ。いいな？ ホーリー1、敵殲滅を開始する」

『了解。ホーリー2、1を補助。同じく殲滅を開始する』

全てはセオリー通りに。これも訓練だ。行動目的を指令室に言わ

なければ、それだけでも減点を食らう。

レーダーは自分の機体を中心に一キロまで補足が可能だ。だが、障害物に反射して地形と状況を探索するため、円形で一キロは計れない。この道の場合、レーダーの画面に映されるのは長方形の道なりの表示地形だけだ。倒れたものにも反射してしまっているからこの地形じゃレーダーは使えないに等しい。

正面モニターで鮮明に見えるのは約2、3キロ先。それ以降先はビルの瓦礫やらで埋もれて進めない……ことは無いが、難しい。

シミュレータの作り出す地形は基本的にはランダムだ。ランダムだが、一回一回の起動ごとに地形が変わるって意味で、模擬訓練中にコロコロ地形が変わるって意味じゃない。ある程度は動いて地形を確認しなければならぬだろう。

「ホーリー1よりホーリー2へ、地形確認を行う。敵影確認をした場合、直ちに戦闘へ入れ」

「ホーリー2、了解」

先陣を切り、先に進む。歩きの固定動作ペダルを踏み、機体を動かす。少しした後、碑賀の機体も俺を追いかけなるべく動き始める。戦術機の動きはすり足をするように動く。これはCBをなるべく揺らさないようにするためだ。走るときは走るときで人間が普通に走るように動く。それはかなり揺れる。だからある程度は訓練で慣らしておかなければならない。

第一章・沖縄編 7

シミュレータの設定上での時間は夕方から夜に掛けて暗くなる時間帯だ。その時間状態のまま日は暮れることなくのまま固定される。赤黒い光が、いやに空気を色づけている。

外から聞こえる音は火が燃える音をとれば静寂だ。集中しても何も聞こえてきそうには無い。

「ホーリー1からホーリー2へ。逆方向へ回り込む。レーダー使用可能な地形へ移動するぞ」

「ホーリー2、了解」

固定動作の走るのペダルを踏み、スティックを両方も右に倒し、旋回させる。円空の内臓武装にはブースターはついていない。よって、できるだけ地上を動かなければならない。

補助装備で外付けの液体燃料を使用したブースターがあるが、打ち抜かれた時危険だと言う形で殆ど使われることはない。

表示される画面は、現実世界とは程遠い世界だが、現実世界とはなんら変わりなさそうな映像が流れている。綺麗に舗装されたビルの壁面もボロボロに細かく描かれている。

火や煙の立ち上り方も、現実とはなんら変わらない映像だ。それであるがゆえに、「現実感」と言う感覚が頭でショートしている。

仮想と現実の中間にいる今、とても曖昧な感覚。

「レーダーに反応。北西！ 一個の反応、かすりしました！」

碑賀の緊急通信が入り、画面からあたりを見渡す。だが、相も変わらず。視界は今ひとつはつきりしない。

「っ！ 弾幕！」

正面から、アサルトライフルの弾丸が白い光を帯びながら扇状に迫ってくる。

「碑賀！ 俺の後ろに回れ！」

そう指示し、自分は持っているアサルトライフルを盾に、弾幕の方向から機体を横向きにし、被弾覚悟で構える。

被弾と同時に、画面にウィンドウが表示され、被弾箇所が表示される。右肩、右腕。

異常は無し。通常通りに動く。数秒間表示された後、ウィンドウは音を立てずに閉じられる。

（なんて奴らだ。レーダ探知でアタリ付けて撃ってきやがった…）

視界が不良な分、俺たちも同じ攻撃方法をとるしかないのだろうが、数が一機体少ない。直ぐ弾切れになるのは明白。今は、とりあえずここから離れるほうが先決だ。

「ホーリー2へ、作戦変更。分隊して叩くぞ。各種判断は任せる！」

「ホーリー2。了解」

後退のペダルを踏み、射撃された方向から180度警戒。相手も俺たちと同じ機体だ。すばしっこく走り回れるはずがない。

周りの風景は邪魔な瓦礫は崩れている。その瓦礫の上から弾丸が飛んできた。その後ろに行かれたらこっちも狙撃しても意味はない。

「ホーリー2。後退します」

「ホーリー1了解」

そう通信が終わった後、碑賀との通信は途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2263c/>

LAST COMMUNICATION ~THE END OF EARTH~

2010年10月11日01時09分発行